

遊星人の海外研究記 その10 ～イギリスでの研究と生活, そしてコロナ禍～

伊藤 祐一¹

1. はじめに

私の海外研究経験は、2019年7月から2年の間、イギリスの大学であるUniversity College London(以下、UCL)のポスドクとして働いていたころのものです。ただし、その多くの時間は、2020年1月のCovid-19の感染報告からはじまったコロナ禍に飲み込まれたために、日本で過ごさざるをえない状況でした。今後、あのような世界規模の問題が起らないことを望みます。本稿では、私の研究活動や海外生活について、そしてコロナ禍での研究や生活の変化について語ります。

2. 渡英前

学生時代、自分が海外で研究するとは全くと言っていいほど想像していませんでした。指導教員であった生駒先生から海外ポスドク時代の話聞かせてもらったこともあり、漠然と楽しそうだなと思っていました。また、アメリカを中心に数回国際学会での発表を経験させていただいたこともありましたが、しかし、英語が非常に苦手な海外で研究・生活することは想像していませんでした。

一方で、私が日本でポスドクをしている間に学生時代の数人の仲間が海外ポスドク生活を始め、彼らの話を聞く機会もあり、海外ポスドク生活へ興味を持つようになりました。特に、学生時代の先輩である小玉さん(遊星人の海外研究記 その3[1], 著者)

は、彼がフランスで働いていた頃、よく(用もなく?)電話をかけてきてくれ、現在進行形の海外生活の話聞く機会が多くありました。おそらく、これらの機会が、私の英語の苦手意識以上に海外研究生活への興味を育み、UCLのポスドクの公募に申し込む大きなきっかけだったのかも今は思います。

結果的には、UCLのポスドクの公募に無事採択されたため、海外での研究を始めることとなります。述べた通り、私は英語が不得意であるため、海外の研究者との議論や海外での生活に不安がありました。しかし、系外惑星研究は欧米で盛んであるため、自分の研究内容をより発展させられると期待していました。

3. 渡英後の生活・研究

イギリスに移住した後、最も感じたことは、研究室の同僚やルームメイトを含め、親切な人々に恵まれた



図1: University College London.

1.国立天文台 科学研究部
yuichi.ito@nao.ac.jp



図2: ある日のホームパーティー。

ことでした。英語を勉強していましたが、どうしても苦手で、そのため生活面ではいわゆる情報弱者になり、多くの苦労や困難がありました。例えば、銀行口座を開設することや健康保険に加入することに苦労し、3ヶ月もかかりました。苦労や困難の度に、同僚やルームメイトに助けってもらった記憶があります。また、ルームシェアの家やUCLの研究室では、時々ホームパーティーやイベントが開催され、英語があまりできなくても楽しい時間を過ごすことができました。

UCLでの研究では、私はUCLの研究者と共同で、主星近傍の系外岩石惑星の大気組成及びその観測スペクトルを数値計算で推定し、ESA M3ミッションである系外惑星大気観測専用宇宙望遠鏡Arielの観測能力で観測可能かどうかを調べていました。この研究により、スーパーアースである55Cnc eにおいて、二次食の観測から水素に富む大気、水蒸気に富む大気、岩石蒸気に富む大気を区別できることが明らかになりました。

UCLでの共同研究環境は、個々の専門に応じて仕事が分業されており、専門が異なる人々と日々議論を行い、非常にスピーディーに研究成果を出していく印象でした。また、多くの国際学会への参加が推奨されており、UCLのある同僚はほとんどの時間をイギリス外で過ごしていました。私自身も実際に約半年間で10回近くの国際学会や研究会での発表経験をえました。この経験は、少し多忙ではありましたが、UCL内の研究者だけでなく、ヨーロッパ内の研究者との共同研究を行うことにつながり、大変有意義なものでした。また、英語が苦手であっても、英語

での生活やさまざまな場数をこなす中で、海外の研究者と研究議論ができる程度に英語能力が向上し、それが足りない場合にはコミュニケーション能力を活用することができるように成長したと感じています。

4. コロナ禍での研究・生活の変化

2020年2月頃、私は日本の研究者との共同研究を行うため、またUCLの同僚を日本の共同研究者に紹介するために日本に1ヶ月ほど出張していました。その最中、コロナ禍に突入しました。特にイギリスでは、コロナ禍初期に感染者が多かったこともあり、UCLの研究者はリモートワークで仕事をするようになりました。それに伴い、私を含む帰国できる研究室内の学生・研究者は、それぞれの国でリモートで働くことになりました。オンラインでセミナーに参加するなどして、議論や研究活動は不自由なくできました。一方で、オンラインでは初対面の研究者や学生との議論は効率的ではなく、特に修士学生の指導が大変であることが分かりました。また、当然ながら、生活面では海外生活とは縁遠いものになりました。



図3: フランス出張中に見学した試作JWST。

コロナ禍は想定より長く続き、UCLで雇われているにもかかわらず、コロナ禍になってから雇用が終わるまでイギリスに戻ることはできませんでした。コロナ禍が始まる前には、同僚や賃貸のルームメイトと対面でコミュニケーションが取れていましたが、それができなくなり、申し訳ない気持ちを抱いたものでした。

5. 海外研究経験の振り返りと展望

イギリスでの研究や生活の経験を通じて、国際的な研究環境や異文化の理解、英語でのコミュニケーション能力が向上しました。また、多くの国際的な研究者とのつながりを持ち、共同研究や情報交換の機会が増えました。これらの経験は、今後の研究活動やキャリアに大きく役立つと考えています。

しかし、コロナ禍での生活や研究は困難な面もありました。特に、同僚や友人との直接のコミュニケーションが取れなくなったことや、オンラインでの学生指導や議論が効率的ではなかったことが挙げられます。また、コロナ禍により帰国を余儀なくされ、海外生活が中断されたことも大きな影響を与えました。

今は、コロナ禍が収束に向かっていきます。それに伴い、再び頻繁に海外へ行くことが可能になることを期待しています。その際には、今回の経験を生かし、より円滑なコミュニケーションや研究活動を展開していきたいと考えています。

6. 結び

海外研究と生活で得られた最も得難いと感じる

経験は、親切な人々に恵まれたことです。特に、UCLの所属した研究室教授のGiovannaさんには、大学・研究室運営だけでなくAriel Missionの運営の中、多忙にも関わらず、研究面のアドバイスや議論だけでなく、いつも親切にいただきました。日本では、当たり前にも他人に迷惑をかけないように仕事や生活を送れますが、海外では情報弱者故に、自分では解決できないと思うことに直面します。しかし、私の海外研究や生活の中では、上司、同僚、友達が助けてくれました。そして、海外での研究や生活は困難な面もありましたが、多くの学びや成長があったことを実感しています。

これから海外で研究や生活を考えている人にアドバイスするとすれば、英語が苦手だとしても、ぜひ、海外へ行って新しいことに挑戦してほしいと思います。私の場合は、新しい人やもの、文化に出会う中で多くの経験を得て、自分の世界感が広がりました。また、海外での研究や生活には様々な困難が伴うことがあります。それを乗り越える力や達成感も得られることを覚えておいてください。そして、異文化の理解や国際的な研究環境で得られる経験は、自身の研究やキャリアにとって非常に価値のあるものです。そして、現地での友人や同僚とのつながりを大切に、互いに助け合いながら過ごすことが、充実した海外研究生活を送る秘訣だと思います。

参考文献

[1] 小玉貴則, 2020, 遊星人 29, 171.

著者紹介

伊藤 祐一

国立天文台科学研究部 特任研究員, 及び University College London Honorary Research Fellow. 東京大学地球惑星科学専攻博士課程修了. 博士(理学). 北海道大学 博士研究員,

University College London research Fellowを経て, 2021年7月より現職. 専門は系外惑星. 日本天文学会, 日本惑星科学会, 日本地球惑星科学連合に所属.